

Topic 1

中だるみの秋だから普段より成績が伸びる!?

2学期は「中だるみの秋」とよく言われます。実際2学期は、学校行事が比較的多く、またテストまでの期間が空くことから、勉強以外に時間をとられ「中だるみ」になりやすいのです。逆に、コンスタントに学習できている人はそれだけで、成績が伸びやすいということ。特に高2生は受験勉強開始の入り口に差し掛かっているため、この時期の勉強は、「やった者勝ち」です。例として、秋から受験勉強の準備を始めたAさんと、始めなかったBさんを比較して、どんな差が生まれるのか見ていきましょう。

◆秋から準備を始めたAさん

- 10月：学校の勉強以外に、受験を見据えた勉強時間を確保することを決意。
土日に多めに時間をとり、週10時間の受験勉強を計画。
- 11月：苦手科目が数Aであることが分かったので、数Aの教科書と学校問題集の直しを計画に組み込む。
- 12月：苦手科目の数Aが模擬テストで好結果。学習の成果を感じてやる気アップ。
冬休みからの本格的受験勉強に拍車がかかる。
- 1・2月：高3から履修する物理と化学を映像授業で先行して始める。
「(基礎なしの)物理、化学は学習量が多く、あとあと苦労すると予想できたので、1月からの受講はとても役立った。」(Aさん談)。
- 3月：苦手単元克服、受験科目の先行受講で、受験勉強準備はOK!
4月から学校の演習中心の授業が始まっても安心!

◆秋からの準備を始めなかったBさん

- 10月：学校の間テスト以外の勉強は手付かず。苦手教科の数Ⅱは学校からの特別課題が出されて、それに四苦八苦。
- 11月：定期テストがない開放感から、勉強時間がゼロの日も。「まわりもそれほどあせっている様子はないし、まっ、いっか。」と思っていた。(Bさん談)
- 12月：模擬テスト結果が返ってきて大ショック。試験後も成績票返却後も復習せず。
- 1月：受験科目の英語・数学・生物基礎を冬の講習で始めたけど、教科書レベルで分かっていないこと、忘れていたことが多すぎて、復習にかなりの時間を要した。
これからの受験準備のハードルが高いことを認識する。
- 2・3月：気持ちはあせり始めたけれども、克服すべき苦手単元の勉強法がわからない。
結局、何からとりかかれば良いのか、暗中模索のまま時間が過ぎる。
- 4月：学校の演習中心の授業では、解けない問題ばかりで、呆然。
「さすがにヤバイと思って、塾に入りなおしました。」(Bさん談)

意外とBさんタイプは多いようです。厳しい部活に所属していると「勉強したいけれど、なかなか時間がとれない」という理由で、結果Bさんタイプになってしまう人もいます。「中だるみの秋」だからこそ、計画的に勉強を進めることで受験を有利に進めることができます。高1生も同様です。自分の勉強時間を決めること(計画を立てること)で、「なんとなく勉強しない日が続く」という悪循環から抜け出すことができます。継続して勉強できている人は、この秋大きく、成績を伸ばすことでしょ。

夏を終えたこの時期の格言は「赤本を制する者は受験を制す」です。赤本の活用次第で、第一志望合格への勉強法は大きく変わります。今回は赤本を活用した効果的な受験勉強について記します。赤本とは「教学社」が発行している大学・学部別の過去問集のこと。表紙が赤いことから赤本と呼ばれています。他に青本(駿台文庫)、黒本(河合出版)も同系統の問題集です。

多くの受験生が考え違いをしているのは、赤本を「入試直前の力試し」に使おうとしていることです。去年の問題だけは入試直前に解くために「残しておく」というのも間違いです。赤本は、受験校の問題傾向と配点を知り、頻出単元から優先的に受験勉強を進めるための戦略指針となる書です。赤本の反復演習だけで、最難関大学に合格した人もいます。

①受験を決めた第一志望、第二志望の大学の赤本は必ず購入し、科目ごとの出題傾向と配点を徹底的に分析しよう。

例えば英作文だけをとっても、完全英作文が出題される大学・学部、条件英作文が出題される大学・学部、並べ替えとして出題される大学・学部、英作文は出題されない大学・学部など、大学・学部によって出題の傾向はさまざまです。自分の受験する大学・学部が英作文は出題されないのに、模擬テストで英作文が苦手克服分野と診断されたからといって英作文対策に時間をとるのは、合格する人の賢い勉強法とは言えません。

②新しい年度の問題から解き始めよう。

古い年度の問題から解き始めて途中で出題傾向が変わっていたら、古い年度の出題分野の対策は行わなくてよかったことになります。新しい年度の出題分野の対策を優先的に行うのが効率のよい勉強法です。過去問は1度だけ解いて終わりではありません。新しい年度から5ヵ年分程度を繰り返し繰り返し解くことが大切です。

③実際に解くことで、難易度を肌で感じよう。

「まだ勉強不足で、赤本を解いても解けるはずない。実力をつけてから解こう…」と赤本を解き始めるのが遅れる人がいます。第一志望の大学・学部の1年分は9月中に実際に解いておくべきです。実際に解くことで、英語なら、その大学・学部の英単語レベルを知り、合格のためにどの程度単語力が不足しているかが分かります。数学なら、計算量が多く時間内に終わりそうにないと分かったら、計算力をアップさせるという方針が決まります。「実力不足を肌で感じる」ことが大切なのです。

自分なりの判断で勉強方針を決めるのではなく、第一志望の出題傾向・レベルと現在の自分の力の差を把握し、それを埋めるための勉強方針を決めることが大切です。



1 大学授業料 「出世払い」を検討

政府は教育無償化の一環として、大学の授業料を国がいったん負担し、卒業後に所得に応じて返済してもらう「出世払い」の導入案の検討を9月から始める。返済が不要な給付型奨学金制度の拡充案とともに、安倍政権が新たな目玉政策に据える「人づくり革命」の具体策の軸となる。制度の設計次第では、卒業後の返済負担が重荷になったり、逆に国の財政悪化に拍車がかかったりする恐れがあるため、海外の事例も参考にして慎重に議論を進める方針だ。

有識者らでつくる「人生百年時代構想会議」の初会合を来月開いて検討に着手する。大学など高等教育の負担軽減に加え、幼児教育や保育の無償化に向けては企業と従業員が保険料を負担する「こども保険」を創設する構想もある。財源の在り方を含め年内に基本方針を取りまとめる。

出世払いの導入は自民党の教育再生実行本部が五月に提言し、茂木敏充経済再生担当相（人づくり革命担当相）も選択肢に挙げている。在学中は政府が大学に授業料分を全額補助し、卒業後に給料から天引きで徴収するオーストラリアの高等教育拠出金制度「HECS（ヘックス）」が検討のたたき台となる。

ヘックスは年収が基準未満の人は返済を免除され、全体の返済割合は国の補助額の80～85%となっている。日本でも同様の制度を導入した場合、返済額が低水準にとどまれば国に財政負担がのしかかる懸念がある。

一方、給付型奨学金は低所得世帯の成績優秀な学生を支援する新制度。自宅以外から通学する私大生を対象に2017年度に先行実施され、18年度には国公立大生や自宅から通う学生を含め月2～4万円を支給する形で本格実施に移ることが決まっている。構想会議では、対象者や支給額の拡大を検討する方向だ。

文部科学省の試算では、大学の無償化には約3兆1千億円の追加費用が必要で、幼児教育なども含めると必要財源は4兆円を超える。財務省は、一律の無償化には慎重な姿勢である。

2 小学校教員採用 英語力で優遇

2020年度から小学校で英語が正式な教科になることを前に、各地の教育委員会が英語力の高い人材の確保に力を入れている。朝日新聞が小学校教員の採用を行う、全都道府県と政令指定市の68教育委員会を対象にアンケートを実施したところ、42教委が今年度の採用で英語の能力を踏まえた加点や、試験の一部免除を行う方針という。

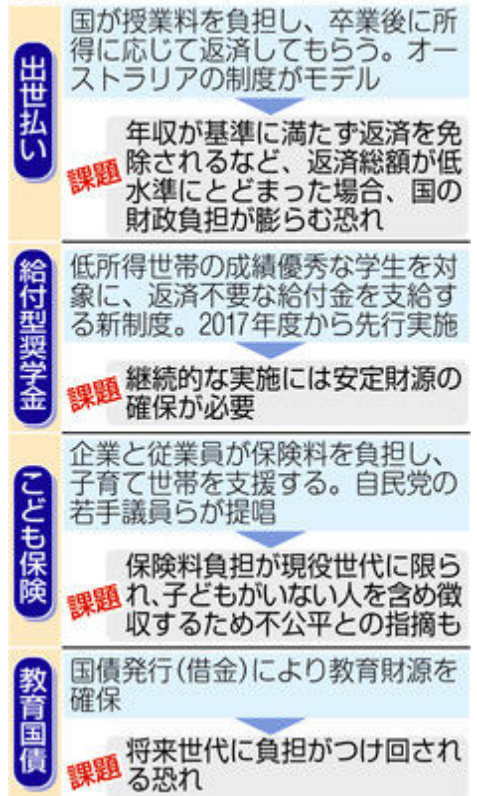
それによると、英検やTOEICなどで一定のレベルを超える受験者について「加点を行う」と答えたのは埼玉県、三重県、山口県など計35教委。大阪市は英検1級程度や中高の英語免許を持つ受験者を対象に1次選考（昨年600満点）で90点、2次選考（同870満点）で30点を加える予定で、同市教委は「全国で最大級の加点」と語る。また、栃木県、和歌山県、福岡県など10教委は英検準1級以上や中高の英語免許を持っている受験者について、一般教養や英語など一部試験を免除する方針である。

3 国立・有名私大 法科大学院の撤退止まず

法科大学院の撤退が止まらない。地方国立大に続き、首都圏の有名私立大にも波及。2015年度以降に募集を停止した大学院は24校、さらに18年度からは青山学院大や立教大など4校が募集しないと発表した。

2004年度にスタートした法科大学院は司法試験対策偏重を見直し、法学未修者や社会人などを念頭に、多様な経歴を持つ法曹を養成する役割が期待された。最大で74校が開設し、定員は計約5,800人に及んだ。しかし、当初は7～8割と見込んでいた司法試験合格率はここ数年、20%台と法学未修者を中心に低迷している。高い費用がかかる法科大学院を経なくても司法試験を受けられる「予備試験」が法曹への最短ルートとして存在感を増していった。こうした現状に学生の法科大学院離れは加速度的に進み、2011年度には早くも初の募集停止が私立大であり、2015年度には新潟大や信州大などといった地方国立大にも募集停止が広がっていき、ほぼ半数の39校に減った。

教育無償化に向けた主な構想



◇ 大学入試の基礎知識 第16回

<奨学金制度のポイント その2>

■ 「貸与型」と「給付型」の2タイプ

奨学金制度のあらましを紹介するにあたり、最初に押さえておくべきポイントは、そのタイプが大きく分けて2つあるということである。

1つは、学生時代に受け取った奨学金を、大学を卒業した後、全額(場合によっては利息も)返していかなければならない「貸与型」。もう1つは、返す必要がない、つまり全額もらえる「給付型」。当然ながら、「給付型」のほうが「貸与型」よりおトクである。

さらに、「貸与型」を細かく見ると、返す際に利息がつくものと、つかないものの2タイプがある。もちろん、他のローン等と比べ、その利息はかなり低い、それでも利息なしのほうがおトクで、人気も高い。

奨学金の種類とおもな運営団体・機関

借りるタイプ(貸与型) <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px; text-align: center;">利子あり</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px; text-align: center;">利子なし</div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ●国 ⇒ 日本学生支援機構(JASSO) ●地方自治体 ⇒ 各都道府県・市区町村 ●各学校 ⇒ 国公立・私立の個々の大学・短大・専門学校 ●その他 ⇒ 民間等の育英団体(企業、個人、その他)
返さなくてよいタイプ(給付型) <small>*日本学生支援機構が給付型を創設 (2017年度は先行実施, 2018年度から本格実施)</small>	<ul style="list-style-type: none"> ●国 ⇒ 日本学生支援機構(JASSO) ●地方自治体 ⇒ 各都道府県・市区町村 ●各学校 ⇒ 国公立・私立の個々の大学・短大・専門学校 ●その他 ⇒ 民間の育英団体(企業、個人、その他) 大手新聞社
<small>条件を満たせば返さなくてよいタイプ(特殊型) 貸与タイプだが、卒業後、運営機関・団体が定める条件を満たせば給付タイプとなる。</small>	<ul style="list-style-type: none"> ●地方自治体 ⇒ 各都道府県・市区町村 ●各学校 ⇒ 国公立・私立の個々の大学・短大・専門学校 ●その他 ⇒ 病院等の各種医療法人

■ 日本学生支援機構は「貸与型」がメイン

現状では、日本学生支援機構の柱軸となっているのが「貸与型」ということもあり、日本国内で実施されている奨学金の利用者の約9割が「貸与型」であり、「給付型」を利用できる人数はまだ少ない。

「貸与型」は、利用した後は受け取った全額を返還しなければならない。つまり、このタイプを利用すると、将来的にかなりな額の借金を自ら背負うことになる。これが「貸与型」のデメリットともいえる。

ここ数年、新聞やテレビで報じられるように、大学卒業後に、就職しても低賃金だったり、非正規雇用で不安定な立場だったり、就職先が倒産したりするなどで、「貸与型」奨学金を返還できない人が増え、社会問題化している。

その点、「給付型」は返還しなくてもよいので、このような心配はない。しかし、「給付型」の奨学金を受けるには、高校における学業成績や、入学試験の成績、さらには入学後の成績が優秀であることや、家庭の経済状況の審査など、厳しい条件がある。募集人員も少なく、「狭き門」であることがデメリットとなっている。

